

カーシェアが 仮設で発進

石巻 6カ所に各1台配備



担当者(左端)からカーシェアリングの説明を受ける
仮設住宅の入居者=宮城県石巻市で(七森祐也撮影)

東日本大震災の津波は、人の命や家だけでなく、交通の便が悪い沿岸部の重要な足である車ものみ込んだ。中古車も買えない被災者が多い中、自動車を共有する「カーシェアリング」で被災者を支えようと、宮城県石巻市の仮設住宅六カ所に、車を一台ずつ配備する試みが始まった。買い物や通院の足として利便性は高いが、慣れない制度にとまどいも出ている。

(木下直哉)

石巻市中心街から六

き離れ、二百世帯が住む須江地区仮設住宅で二十六日、カーシェアリングの説明会があった。参加者は、年配者ばかり五人。試みを始めた日本カーシェアリング協会(神戸市)の吉沢武彦理事(三)が、燃料代など車両維持費を共同で負担するだけなどと説明した。「何時間でも使えるのか」「冬タイヤはどうするの」などと質問を浴びせた参加者たちは、仮設住宅に置く乗用車に実際に乗り込み、装備を確認した。この日の利用申込者は近藤荒樹さん(七)ただ一人。沿岸部の自宅が津波で全壊し、夫婦二人で仮設住宅に住む。日用品の買い出しは週一回の移動販売車や中心街に住む息子(五)を頼ってきた。

「広めたい」協会理事が奔走

慣れ親しんだ土地を設けられた住宅の利用者はそれ離れ、「道の勝手も分かれ四、五人にとどまかんねえし、足も悪い。須江地区仮設住宅から外出するにも一苦労で説明を聞いた植松和だ」。路線バスの停留代さん(七)も「事故の所は、坂を一き下った問題もあるし、使い方は先。「息子も仕事があるをめぐってトラブルになるし、急に体が悪くなるのが心配」と、申ることもある」と気遣い込みを見合わせた。利用を決めた。説明会では「軽自動車中心街から離れた高車の方が使いやすい」台に多い仮設住宅は、「手動変速車を用意し交通の便の悪さから入ってほしい」などの要望居が進まないケースも出ていた。被災前もある。カーシェアリングを使った車との違いも、グなら、車の購入代も利用者増への壁だ。かからず、集会所のノ吉沢理事は「石巻市一トに名前と利用時間で成功の前列を作り、を書いて予約するだけ他の被災地にも広めたい」と話し、不便さか協会が車の配備を始ら仮設住宅内にこもったのは七月下旬かてしまつ現状を変えよう。だが、被災者にとくと、被災者への説明まどいもあって、各仮を続けている。

カーシェアリング

レンタカー会社などが運営するサービスに加入し、会員間で自動車を共同利用する制度。15～30分単位で利用できる。欧州が発祥。公共交通機関が発達し、駐車場代が高い東京や大阪などの大都市圏で広がってきた。名古屋圏では、名鉄協商(名古屋市)などが展開する「カリテコ」などがある。被災地では、日本カーシェアリング協会が寄付で車や車検代などを賄い、被災者の負担を最少にしている。